

松本清張記念館

◆館報◆
2005. 3
第18号

およそ謀略というのは、
一見信じがたい現象をどるものだ。

『風の息』上・下
昭和49年2月 朝日新聞社



「風の息」は「赤旗」に
昭和47年2月15日から
48年4月13日まで
連載された。

現在入手できる本
『松本清張全集』第48巻(文藝春秋)、
『風の息』上・中・下 文春文庫(文藝春秋)

目次

●濱野彰親講演会	2
●展示品紹介	4
●清張原風景「点描」	4
●みんなの広場	5
●友の会活動報告	5
●研究誌「松本清張研究」第六号発行	6
●探検！清張記念館	6
●企画展紹介「小説に読む考古学」	7
●トピックス	8

作品紹介

古書店「蒼古窟」の店主、中浜宗介は、ある婦人が持ち込んだ航空関係の資料に目を留めた。それは一九五二年の「もく星」号墜落事件に関する調査資料だった。店の常連で新聞社の論説委員である伊藤豊との雑談の中から、当時の報道に見え隠れする謎の部分に興味を持つ。そんな時、宗介の俳句雑誌の同人である大学院生の小枝欣一が三原山で発見したダイヤのブローチを題材にした句を読んだ。それが「もく星」号で遭難した相善八重子の遺品らしいと推測した欣一は、遺族の手に戻したいと考え身元を調べたが、彼女の正体は忽然と闇に消え入っていた。一方で宗介と伊藤が手がかりを求めて動くうちに、当時の報道状況や、航空に関する資料が徐々に集まる。宗介は改めて欣一に八重子の調査を持ちかける。占領下の接収ダイヤにまつわる暗い死への疑惑から、欣一の粘り強い追求が始まる。甲府、東京、神戸、福岡、名古屋と八重子の過去を追いつめていくうちに、占領軍内部や日本政府との複雑な関係が次第に明らかになる。

遭難当時の状況を知る人物からの証言を得、報道や発表と照合した宗介と伊藤は、事故に関する調査報告書に疑念を持つ。調査会の事務局長格であった原文夫に欣一を派遣し「発表文以外」のことを聞くことにした。しかし、原は諸方に「迷惑がかかる」と言うて容易に口を割らない。煙たがられながらも、原の旅行先に押しかけ、なんとか三度目の面会が実現した。原が当時日記をつけていたと信じる欣一は見せてくれと食い下がった。その熱意と執念に打たれたのか、原は見せることを約束した。欣一ら三人は、これで謎が全て明らかになると思ったが……

(学芸員 柳原 暁子)

とき：平成17年2月12日／於：松本清張記念館

小説と さしえに 就いて

小説とさしえ

さしえというものが重く見られ始めましたのは江戸の中期以降です。絵入りの草双紙とともにさしえを描く人が現れました。有名な話で馬琴と北斎の喧嘩があります。道行の場面に北斎がバツクに狐の画を沢山描きました。これじゃあ狐に化かされているみたいだと怒った馬琴に、北斎は頑として譲りません。結局、出版元は困った挙句、これは絵本であるからと北斎を取りました。馬琴は怒って両者はそれぞれ仕事をしなくなりました。

私にも長年の間には似たようなことがありました。ある作家は、毎回描く場面を指定してきて、一回や二回は描いたんですが、これがずっと続いたのは腹が立ちました。原稿を読みさしえの場面を決めるのは画家のほうです。作家が画家の領分まで侵入してくるというのはけしからんと(笑)、その人とはそれぎり仕事をしなくなりました。

しかし、時々失敗もあります。随分昔のことですが、口絵といつて雑誌見開きカラーページに載せる時代小説の画を描いたとき、刀を右に差しちゃったんです。印刷されてから気が付きました。内心ヒヤヒヤしましたが、編集者や読者からも何の指摘もなくそのままになりました。こういう失敗は時々あるものです。

杉全直氏との奇縁

今回、企画展で一緒に紹介されている杉全直さんとは奇縁があります。といつてもお会いしたことはありません。杉全さんは、私が昭和五十年に講談社の出版文化賞を受賞したときの審査員の一人でした。受賞後、審査の時に杉全さんが猛烈に推してくれたといつことを知らされ、実にびっくりしたんです。その杉全さんと、今回、一緒に紹介されるということも光栄でもあり本当に嬉しいと思っております。杉全さんが亡くなられた時はお葬式に行きましたが、ついにお会いすることができなかったことをとても残念に思っています。しかしこうして企画展で一緒になるなんて、縁があるんだなあと思つてます。

火野葦平・川上宗薫・松本清張との出会い

杉全さんも元は福岡の方だそうです。私は不思議な縁で人生の節目となる出会いは九州出身の方が多いんです。初めての節目は昭和二十五、六年頃、火野葦平さんとの出会いです。そのころ火野さんといえは、丹羽文雄、石川達三らとともに天下を取っていた時代です。きっかけは、「トーモアクラブ」の編集長だった牧野さんが火野さんと早稲田の同期で、「君の画は火野くんに合うから」と紹介してくれたのです。火野葦平さんは、「北九州市の若松の方ですよ。私も新聞連載にあたり、小説の舞台である若松に行つたことがあります。新幹線もない時代ですから、汽車で二十六時間くらいです。とにかく大変な思いをして行きました。若松の火野邸へ着きますと、女中さんが出てきて今日はお留守ですつて言つてくれます。仕方なしに、旅館までからぐらと歩いていまして、後ろから「おーい、おーい」と声が出て、振り返ると、火野さんが和服で自転車で乗って追っかけてくるんです。前日まで「九州文学」の連中と飲んで仕事ができなかったので「今



濱野 彰親 はまの あきちか

1926年5月8日、東京生まれ。挿画家。
1964年 シェル美術賞展佳作賞、1975年 講談社 出版文化賞を受賞する。
1994年 出版美術家連盟副理事長、2001年 会長に就任。
清張以外にも、火野葦平、山崎豊子、川上宗薫、結城昌治などのさしえを手がける。

日はどんな客がきても断つてくれと女中さんに言っておいたそうです。その日はふぐをこちそうになりました。昭和二十六年ですから、ふぐは大変珍しくて美味しかった。夕方に一緒に道を歩いていると、正面からやって来た恐ろしい連中が、火野さんの前で「いやどうも」なんて最敬礼するんです。そういえば火野さんは沖仲仕、玉井組の若親分でした。二人目の作家との出会いは昭和四十三、四年、川上宗薫さんでした。とても明るい方で、親しくしていました。菊村さんと僕と三人で、しょっちゅう銀座で飲んだりヨーロッパに行ったりしていました。その方の画は二十年ほど描かせていただきました。

そして第三の節目といつのが、松本清張先生です。昭和五十一年に日



本経済新聞から、清張先生のさしえをかいていただけませんかという電話がかかってきました。松本清張といえは当時すでに巨匠ですから、何ごとかと思いました。作品は連作集「黒の線刻画」の三作目「利」後に「馬を売る女」に改題)という小説です。これが先生との最初の出会いです。それ以降十年間ほどお付き合いすることになりました。

清張の細やかな配り

小説にもいろいろな作風がありますね。なかには、会話だけで進んでいくので、人物の年齢や容姿が分からないまま仕方がないから描いていると、突然(眼鏡をすらし)なんて描写が入ってきて、途中から眼鏡を描かなくちやいけないことがありました。また、原稿が遅い作家の場合で、遠方の実在する商店だとかが登場すると困ります。時間がないから行ってくるわけにもいかないし、写真もないんですから。

清張先生はとてもその辺に気を配ってくださいる方でした。小説が始まる前から、「ついでに所が出てきますから行ってください」とか、遠くへ行かない場所は全部写真を撮って渡してください。こうなると描くほうは本当に嬉しい。気の使い方が非常に細やかなんです。さすがに昔デザイナーとして活躍していただけあって、文章を画にした場合どうなるかというところをよく「存知なんですね。ですからついでにも必死になつて描きました。」

ある時、小説に世田谷の代田といつところが出てきました。代田の駅から陸橋を渡って、ここに商店があって、ここを通ると白い大きな屋敷があつて、その先にポストがあつて……、描写が細かく書いてあるんです。私も、代田の駅に行つて原稿を持ちながら書いてあるとおりに歩いてみました。すると本当にちゃんと目的地に着いたんです。これには参りましたね。きちんと取材して書かれるんだなと驚きました。小説に対するリアリティなんですね。

会場には、「十万分の一の偶然」(「週刊文春」連載)を担当した編集者、鈴木文彦氏(現在は株式会社文藝春秋・取締役)も来場された。ここからはお二人に話をうかがった。

連載当時を振り返って

鈴木 「オール讀物」から「週刊文春」に異動してすぐ、清張さんの連載が始まると告げられました。「挨拶を兼ねてお話を聞きに伺つたら、さうそく明朝早くハイヤーを呼んで東名高速をロケハンし、事故の起こりそうな場所を探して来いと言われました。それが「十万分の一の偶然」になったわけです。清張さんの指示をもとに運転手さんと沼津のほうから静岡あたりまで行つたと思います。カーブの多そうなところとか、人家から離れている場所とかを、一日がかりで探し、清張先生をお連れしました。

濱野 鈴木さんが撮つた写真をもつて私が画を描いていたんですよ。その時は鈴木さんだとは思わなかった。今日初めて分かつたんです。

鈴木 清張先生は「自身で画をお描きになるので、いいシー



ンを思ったとおり、またそれ以上に描いてもらうと、本当に喜んでおられた。清張先生も多忙ですから原稿が早くない。つまり濱野先生がお描きになる余裕もそうなかった。さうきの代田のお話ですと、濱野先生にしても忙しいお仕事の合間をみて、おそらく朝八時から九時くらいに代田に行つてスケッチをしなければいけないような画をください。これに清張先生はすごく喜ばれた。編集者に対してもそうでしたが、一生懸命応えようとして努力すると、力及ばずとも喜んでください。そうでないといふ「くカミナリが落ちる(笑)」。

濱野 それはそうかもしれませんが、私は清張先生の小説のさしえを描くと自分の力が最大限に出てくる。不思議なものでね。だから清張先生のさしえを描いたということは、私の人生にとって非常に「プラス」になった。

鈴木 濱野先生のさしえについて「よかった」と伝言を頼まれることはありましたが、清張さんから濱野先生に死てたお礼状や、写真に添えたお手紙を企画展で拝見して、あれだけ丁寧書いて、頻繁に出していたというのを初めて知りました。

濱野 恐縮しちゃうんですよね、あの手紙は。ものすごく誉めてあるんです。誉めすぎじゃないかと思つていてなんですけど(笑)。

鈴木 「利」、「十万分の一の偶然」のお仕事からは、本当に濱野先生とのコンビがどんどん続いていきますよね。

濱野 うれしかったですね。つまりほとんど間が空かずに松本先生のお仕事が来てたんですね。巨匠ですから張りもありますし、光栄です。だから私の中ではいい仕事が出来たと思つています。

鈴木 これからもますますがんばってください。

上京希望の手紙



「山名さんと電通の新井さんなどに会うと、アド・デザイナーとしての野心のようなものが起ってきています。この方面でも伸び度い気持ちです。／それから、率直に小生の心を申し上げますと、文学の方でも成長し度いのです。『承知のようにチャージャーズム』というものは浮気なもので、東京を離れた地方に居ると、どうしても忘れ勝ちで、次々と新しい受賞者や新人が出てくると完全に抹殺されます。田舎で立ち腐らぬ前に、何とか今のうちに早く東京に出たいと思います。」

東京本社広告部部長の矢野伊三見氏に宛てた、東京本社への転勤を希望する手紙です。日付はなく、かすかな消印から、昭和二十八年三月のものであることがわかります。『或る『小倉日記』伝』で芥川賞を受賞した直後です。

この頃、少しずつ原稿の依頼は来るものの、まだ東京に出る自信はありませんでした。しかしある日「松本君も地方名士になつたな」との声が耳に入ります。「もちろんその人たちは他意があつてそう言ったのではなからう。だが、『田舎名士』としてサラン者みたいになりたくなかった。(中略)去就に迷っているときのわたしはそのとき決断がついたようなものだった」(『雑草の実』)と書いています。一月の受賞からこの手紙まで二ヶ月ほどであることを考えると、意外に早い決心であつたことが伺えます。

手紙に登場する「山名さん」とは、資生堂のデザイナーなどで知られたデザイナーの山名文夫氏。清張は戦前から旧知の間柄でした。清張は「西郷札」が直木賞候補になつた昭和二十六年、全国観光ポスター公募でも特選賞に次ぐ推薦賞を受賞します。清張の芥川賞受賞の報に接した山名氏は「こんなことで画をやめるのは惜しい」とも言ったそうです。

のち、東京本社広告部から西部本社への転勤希望者があつたことから清張の異動も叶い、十二月一日付で転動します。社用箋に書かれた丁寧な筆跡からは、控えめながらも文学と広告デザイナー、二つの道に頭角を現しはじめた清張の野心と決断が伺える手紙です。

(学芸担当 小野 芳美)

清張原風景

点描

中山神社



戦時中の絵はがき



説によれば、幕府検分のため移送中に夜が明け、やむ無く現在地に埋葬されたとされる。

中山神社は、慶応元年「中山社」として創建、国道一九一号線の建設に伴い現在地に移転し、昭和三年五月県社「中山神社」となった。社殿の建設に先立ち社務所が建設され、大正末年には宮司が常駐するようになった。

昭和二年、清張は川北電気小倉出張所の閉鎖により失職しており、訪れたのは建設途上の中山神社であつたと思われる。「さすがに本当の新聞記者とは言えず、ある同人雑誌の取材で来たと言い、忠光をテーマにしたいから話してくれと申し込んだのである。」(『半生の記』)

若くして非業の死を遂げた中山忠光は、清張にとって自らの足で取材した初めての歴史上の人物であるが、残念ながら作品としては結実しなかった。

(中野 吉明)

「この給仕時代、ボーナスを貰つて、親に渡したあとの小遣のいくらかを割いて、当時の金で二円くらいの手土産を持ち、山口県豊浦村という下関の近くにある中山神社の宮司を訪ねたことがある。／中山神社というのは、大和十津川の旗揚げで有名な公卿中山忠光を祀った宮で、忠光は毛利藩に匿まれたとき、この地で暗殺された。私は宮司に会い、持って来た土産を出し、忠光の話を知りたいといつて、手帳を出して構えた。」(『半生の記』)

清張の川北電気給仕時代、十七、八歳の頃の思い出である。

中山神社の祭神中山忠光は明治天皇の叔父にあたり、尊王攘夷派の急進公卿であつた。大和の天誅組拳兵に失敗し長州へ逃げのびるが、長州藩の藩士に付け狙われ、田耕で暗殺されたという。十九歳と六月の短い生涯であつた。「この地」と田耕では約三十キロの距離があるが、



みんなの広場

今回は、特にテーマを決めずに、最近お寄せいただいた皆さんの「声」を自由掲載しました。

- ・全館とおして見やすく、資料等も、分かりやすかった。以前からファンで多数読んでいたが、著書の多さに改めてビックリしました。(50代・福岡・女)
- ・「半生の記」などで清張氏の生い立ちを知っている読者としてこの地にこの館が存在していること自体、氏への尊敬と敬愛を故郷が示しているような気がしてとてもうれしい。(50代・大阪・女)
- ・作品をまったく読んだことがないのですが、ここに来て清張さんの人間性が好きになったので、ぜひ、作品に触れてみよう、強く思いました。(30代・大阪・男)
- ・今回たまたま小倉に来るにあたって偶然にここを訪れた。清張さんがどういう人物であるかを知ることができ、勉強になった。42歳という年齢からの作家への転身は人間の可能性を垣間見ることができ、自分もそのような人間になりたいと刺激

を受けることができ、よかった。次回来る時には、彼の作品をひとつは読んで訪れたい。(20代・愛知・男)

- ・挿画展は、作品のストーリーと画家のプロフィールなどが紹介されていて、本では知ることができないことが見られて良かったです。(30代・市内・女)
- ・「点と線」が好きです。あさかぜが廃止になるため乗りに来て、ここにも来ました。映画で「点と線」を上映していたのも、感激でした。(40代・神奈川・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。

清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

● 生誕祭 (12月21日(火):参加者16名)



松本清張が生誕した日にちなみ、松本清張記念館において生誕祭を行いました。清張原作映画を鑑賞したあと、参加者の中で清張作品や人物に関する様々な想いや疑問などを、記念館の学芸員も交えて、ざっくばらんに語り合いました。

● 第8回清張サロン (3月15日(火):参加者22名)

今回は、現在開催中の企画展でも取り上げている作品「十万分の一の偶然」をテーマに、北九州市立大学教授・赤塚正幸先生を講師にお迎えして、サロンを実施しました。



参加者がそれぞれ感想や意見を述べ、先生がそれに対して解説やコメントを加えていく形式で、和やかな雰囲気の中で、活発な意見交換が行われました。

サロン終了後は、記念館学芸員の案内で企画展「挿画展—松本清張作品を彩る単色の世界」を見学しました。

● 文学散歩 (2月25日(金):参加者51名)

まず、久留米市にある石橋美術館を見学しました。ここでは西洋と日本の近代絵画を中心にさまざまな分野の美術品が展示されていて、清張作品にも登場する青木繁と坂本繁二郎の絵画もあり、見応えのある内容でした。

次に、太宰府天満宮を散策し、その後現在建設中の九州国立博物館の内部を、ガイドボランティアの案内で見学しました。展示が完成する前の館内部を見学できるのはこの時だけとあって、貴重な体験をすることができました。



そして、「点と線」の舞台となった福岡市の香椎を訪問しました。西鉄香椎駅から香椎海岸へ、作品の中で鳥飼刑事が歩いたコースを会員の皆さんと一緒に歩いて辿りました。西鉄香椎駅は古い時代の面影を残した、情緒を感じさせる駅でした。また、香椎海岸は綺麗に整備されていて、作品当時の情景を見ることはできませんでしたが、作品の舞台に立てたことで感慨も一入でした。

友の会会員 募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で3000円となっております。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

研究誌『松本清張研究』第六号発行

定価 二〇〇円



年一回発行の『松本清張研究』は第一線の研究者を網羅し、つねに新鮮な特集を組んでいます。今回の特集は「清張古代史の軌跡と現在」です。清張は研究史を堅実に押さえた上で、独自の史眼に基づいた新説を積極的に発表し、日本古代史学界を刺激しつつきました。古代史・考古学への関心、研究の端緒となったモデル小説『断碑』から、最後まで考案をつづけた『邪馬台国』論まで、その軌跡の全貌を紹介し、「一大率」魏派遣官説や「ゾロアスター教徒の古代日本への渡来」説などの清張説を、現在の研究レベルから再検証しました。

特集 清張古代史の軌跡と現在

対談 清張古代史の現在を再検証する

——邪馬台国論と『火の路』を中心に

門脇禎二・森浩一

飛鳥の石造遺物と斉明天皇——酒船石遺跡と益田岩船

直木孝次郎

松本清張の古代史研究

上田正昭

松本清張の邪馬台国論

岡本健一

『火の路』検証

山口博

「石の骨」の虚実

春成秀爾

グラビア

松本清張所蔵の古鏡・銅鐸

藤丸詔八郎・難波洋三

作品論

「断碑」論——藤森栄二「森本六爾伝」と共に

平岡敏夫

比喩としての翡翠——松本清張『万葉翡翠』をよむ

中西進

古代史の薪は二度燃え上がる——「陸行水行」の成立と展開

郷原宏

仮説を語る小説——「東経139度線」

綾目広治

麦の種が落ちたのは何のためか——「火神被殺」論

天沢退二郎

眩人の周辺

陳舜臣

松本清張記念館古代史シンポジウム

蘇我氏——逆賊の実像を探る

水谷千秋

加藤謙吉、平林章仁、亀井輝一郎、辰巳和弘（司会）水谷千秋

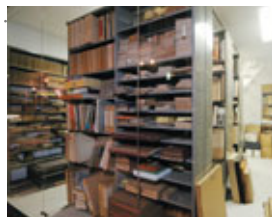
蘇我氏と日本の古代——『日本書紀』の記載の検討

水谷千秋

清張古代史の軌跡——関連作品記事・著書目録

きよしとハルコの探検! 清張記念館

1F 2F 再現家屋 書庫の巻



ハルコ ここから見えるだけでも、文学、歴史、地理、新聞縮刷版、写真集、古典、哲学、心理学…。すごいジャンルの幅。大学の研究者も使うような、かなり専門的な資料もあるそうよ。

きよし 僕が一生手に取らないような本だろうな。清張のことだから、作品をひとつ書き上げるためにさぞかし膨大な資料を集めたんじゃない?

ハルコ でも家が本に占拠されてしまうから、連載のたびにかなりの本を買う一方で、手放さざるを得ないこともあったそうよ。手放した本がまた必要になって買い戻したり、本屋にはいいお客だったかも。現在の書庫は清張の死によってその代謝を止めた姿なのよ。

きよし ということは、この書庫は清張の思索の最後のかたが残ってるってこと? そう考えると興味深いね。

ハルコ あら、このトランク「S. Matsumoto」…本名の「きよはる」じゃなくて「せいちょう」よ。書きたいものが尽きなかった彼は、少しでも長い時間「作家・松本清張」でいたかったのかもね。

きよし 君も僕とずっといられるように苗字を変えてみないかい? な～んて、えへへ。

ハルコ あらそう。ペンネームでもいいわけね。



◀持ち手のとなりに名前が見える

誰が名付けたか「蔵書の森」。書籍が増えるにしたがって増築された書庫はまるで迷路のよう。ガラス越しには見えない書庫の奥まで2階のモニターで見られます。また、書庫の本のタイトルは「情報ライブラリ」で見ることができます。

小説に読む考古学

〜松本清張文学と中近東〜

会期／平成17年3月19日(土)〜7月10日(日)
会場／中近東文化センター(東京都三鷹市)

この企画展は財団法人中近東文化センターの主催で開催されておりますが、松本清張記念館も協賛・協力しておりますので、その内容を紹介します。
なお、記念館でも本年12月に、同内容(一部変更の場合あり)の企画展を開催する予定です。

推理小説、サスペンス、ドラマ、劇画、「アニメ」などは、考古学や中近東をしばしば題材としています。おそらく読み手や鑑賞者が空想に浸り、夢、冒険といった非日常性にひとときの癒しを得、不確定なものへの奔放な挑戦、推理する知的好奇心にあてふおもしろさを期待できるからでしょう。

「このような世界を、自らの文学作品の『ジャンル』に確立した特色ある作家として松本清張(一九〇九〜九二年)を挙げることができます。『社会派ミステリー推理小説』を創出した『芥川賞作家は同時に、独自の『清張史観』から『古代史もの』、『考古学もの』などと呼ば称される作品を数多く生み出し、その人気は依然として旧に倍する勢いです。

「このたびの企画展では、松本清張作品に登場する土器、円筒印章、「測天儀」、ササン朝ヘルシア期の「瑠璃碗」他の資料や中近東映像を紹介するとともに、作品の舞台のひとつとして頻出の当地「武蔵野」を「文学散歩路」としてあらためて逍遥してみたいとおもいます。

(企画展チラシより)

開館日・時間

水・金・土・日曜日の週4日
10〜17時 (入館は16時30分 まで)

入館料

一般……………800円

高大学生……500円

団体15名以上 200円割引。
65才以上及び中学生以下は無料。

問い合わせ先

会期中、講演会や朗読劇、文学散歩などの催し物もあります。

中近東文化センター

東京都三鷹市大沢3-10-31
Tel: 0422-32-7111 Fax: 0422-31-9453
<http://www.meccj.or.jp>



シリンダー・シール(円筒印章・イラク)



モスク風の建物のスケッチ画(画・松本清張)



天体観測儀(イラン)

平成17年度

中学生・高校生

読書感想文 コンクール

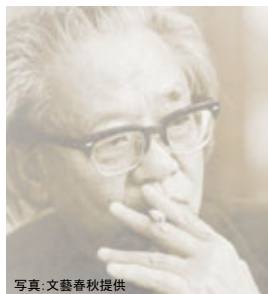


写真:文藝春秋提供

昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神が伝えられていけば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「球形の荒野」(文春文庫『球形の荒野』)

「地方紙を買う女」

(角川文庫『緑・白い闇』、新潮文庫『張込み』、文春文庫『松本清張傑作短篇コレクション』上 宮部ゆき編)

「点と線」(新潮文庫『点と線』)

■応募方法

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要なものはコピーをおとりください。

■応募締切 平成17年11月7日(日) ※消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2-3
松本清張記念館 感想文コンクール係

■発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。

なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

○最優秀賞(1人) 《モンブラン》万年筆

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 《モンブラン》文具(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 記念館グッズと図書券

特別企画展の延長



企画展「挿画展 —松本清張作品を彩る単色の世界」の開催期間を、平成17年5月8日(日)まで延長することになりました。

まだご覧になっていない方はこの機会に是非ご来場下さい。

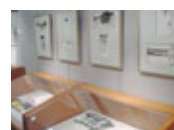
『挿画展 —松本清張作品を彩る単色の世界』

[開催期間] 平成17年1月15日(土)～5月8日(日)

[会場] 松本清張記念館 地下企画展示室

[入場料] ●一般:500円 ●中高生:300円

●小学生:200円※常設展示観覧料に含む。



2004年度・ドラマ化された清張作品

2004.10.11

[21:00~22:54]

月曜ミステリー劇場「殺意」

TBS

2004.10.14 ~12.9

[21:00~21:54]

テレビ朝日開局45周年記念「黒革の手帖」

テレビ朝日

2005.1.12

[21:00~22:54]

「女と愛とミステリー」4周年記念「黒い画集 紐」

テレビ東京

●編集後記●

昨年は、九州に多くの台風が上陸。9月には開館以来初めての台風直撃となりました。職員一同緊張しましたが、特にこれといった被害はありませんでした。そして今度は地震です。心配した方から、お見舞いの便りまでいただきました。でも大丈夫です。あっという間に、忙しい日々に戻っています。これからもよろしくお願いします。(中野 吉明)

新北九州空港 2006年3月開港



新しい空、新しい私。



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区城内2番3号

TEL 093(582)2761

FAX 093(562)2303

http://www.kid.ne.jp/seicho

制作 (株)エディックス

●開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)

●休館日 年末(12月29日～12月31日)

●観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)

小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体

●アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分

小倉駅からは100円バスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)

車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

